

# 体育授業における生徒の学習目標に対する意識とその実施状況に関する検討

清水康太

## The Consciousness of The Student against The Learning Target in The Physical Education Class and Its Doing Situation

Kata SHIMIZU

### I. 緒言

教科としての体育の学習目標は「歴史的にみて、何を本質的に有用なものとみなすか一定されてこなかった。その時代時代に社会が要請する人間像に大きく左右されて、体育の陶冶目標が決定され、それに基づいて運動が分類されてきたからである<sup>1)</sup>。」

現在の体育授業における学習目標はどういったところにあるのだろうか。教育基本法の改訂に伴うポイントとして、まず基礎的基本的な知識・技能の習得が挙げられている<sup>2)</sup>。体育でいうとこの部分は「できる」「わかる」にあたるため、これらは体育の学習内容を決めるキーワードになる。また、子どもたちが体育授業において抱く目標の構造は、「情意目標」「運動目標」「認識目標」「社会的行動目標」の4次元に大きく分かれる<sup>3,4)</sup>。

ところが、現状の体育授業は「運動目標」と「認識目標」に関して十分に教育していない状況にあるのではないかと危惧されている<sup>5)</sup>。こういった状況や、体育科の存在意義や説明責任の理由から、児童・生徒たちが「できる」「わかる」ことは重要であり、それらを関連させながら、確実に学習成果を高める教師の力量と省察的実践力が求められる。そこで本研究は、中学生の体育授業に対する意識と、その意識が授業の中で反映さ

れているかどうかを把握し、体育授業がどのような状況下で行われているかを分析する。それにより、更なるよい授業を展開していくための方策を考える基礎資料を得るとともに、授業実践者である教師がどのような観点で授業を立案し設計するかを考察する。

### II. 方法

#### 1. 本調査の方法と内容

予備調査で調査紙の信頼性を確認（Cronbachの $\alpha$ 係数）したのち、本調査を実施した。なお、 $\alpha$ 係数は0.90以上であった。

調査は無記名質問用紙の集合法で実施した。内容は高田ら<sup>6)</sup>が作成した体育授業についての調査（中学校用）を参考にして体育授業に関する評価尺度と項目内容を変更し、中学生の体育授業に対する意識について量るための20項目にわたる調査紙を作成した（以下、重要度と称する）。また、この調査紙の20項目は、「情意目標」「運動目標」「認識目標」「社会的行動目標」それぞれ5項目ずつから成っている。これらの各項目は1項目につき5点満点で回答させている。さらに、この調査紙では、1学期における体育授業内で各20項目をどの程度達成できたのかの度合い（以下、実行度と称する）も調べた。

## 2. 本調査の対象及び期間

本調査は、愛知県内の公立中学校に在籍・勤務している生徒及び教師を対象に行った。生徒を対象に行った調査は、愛知県内の公立中学校6校全学年から、生徒男女合わせて1799名に対して行った。調査紙の有効回答者は1616名（男子792名、女子824名）であり、有効回答率は89.83%であった。また、教師を対象に行った調査は、愛知県内の公立中学校7校に勤務している教師219名に対して行った。調査紙の有効回答者は205名（男性125名、女性80名）であり、有効回答率は93.61%であった。なお、本調査は2009年7月中旬から下旬にかけて実施した。

## 3. 統計処理

調査集計と統計解析の手続きには、SPSS for Windows Ver.11を用いた。2群間における平均値の差の検定にはt検定を、多群間における平均値の差の検定には一元配置分散分析-多重比較(Bonferroni)を行った。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 生徒における重要度と実行度

すべての項目で重要度が実行度を有意に上回った。重要度の総得点は平均87.68、実行度の総得点の平均は81.47であり、全体としても重要度が有意に上回った。授業のなかで体育に対する意識が反映されていないことがわかった。

### 2. 生徒の性差からみた重要度と実行度

重要度の総得点を性別でみると、男子は87.76、女子は87.61で有意な差がなかった。重要度の性別比較において、社会的行動目標、情意目標において女子が男子より有意に得点が高く、運動目標において男子が女子より有意に得点が高かった。

実行度の総得点を性別でみると、男子は81.86、女子は81.10で有意な差がなかった。社会的行動目標において女子が男子より有意に得点が高く、運動目標、認識目標において男子が女子より有意に得点が高かった。

総じて、男子は運動目標、認識目標を重視し、女子は社会的行動目標、情意目標を重視していることがわかった。

### 3. 生徒の学年差からみた重要度と実行度

重要度では、総得点・社会的行動目標・運動目標・認識目標において、1学年は2・3学年より有意に得点が高かった。情意目標は、1・3学年が2学年よりも有意に得点が高かった。

実行度について、総得点では1学年が2学年より有意に高かった。運動目標及び認識目標においては1学年が2・3学年より有意に得点が高く、情意得点では1学年が2学年より有意に得点が高かった。社会的行動得点では1・3学年が2学年より有意に得点が高かった。

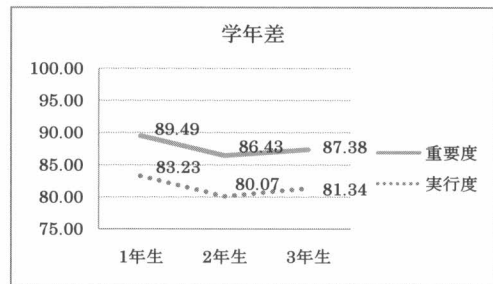


図1 総得点の学年差

2学年になると思春期に入ると、生徒の規範意識が下がり、それが体育授業への意識にも影響していると考えられる。

### 4. 教師と生徒の持つ目標の重要度の違い

教師全体の重要度における総得点の平均は87.67であった。教科別でみると、体育教師が90.86、その他の教師が87.11であり、有意差が示された。また、情意目標、運動目標において、体育教師がその他の教師より有意に得点が高かった。

生徒と教師全体との比較について、社会的行動目標は教師全体が生徒より有意に高い得点を示し、認識目標は生徒が教師全体より有意に高い得

表1 重要度における生徒と教師全体の比較

	生徒	教師全体	t 値
社会的行動目標	23.18	23.99	-6.26**
情意目標	22.58	22.46	0.75
運動目標	21.14	20.81	1.70
認識目標	20.78	20.40	1.97*
総得点	87.68	87.67	0.05

\*:P<0.05, \*\*:P<0.01

点を示した。

生徒と体育教師との比較では、社会的行動目標と運動目標において体育教師が生徒より有意に高い得点を示した。

表2 重要度における生徒と体育教師の比較

	生徒	体育教師	t 値
社会的行動目標	23.18	24.21	-3.72**
情意目標	22.58	23.24	-1.26
運動目標	21.14	22.31	-2.78**
認識目標	20.78	21.10	-0.77
総 得 点	87.68	90.86	-1.68

\*:P<0.05,\*\*:P<0.01

表1, 2のように、教科に関わらず体育には社会的行動の育成を求められていることがわかった。また、体育教師は運動目標にも高い意識を抱いているが、この目標に関しては生徒にあまり意識されていないことがわかった。

#### 5. 教師による体育授業に関する問題点・改善点に関する記述

自由記述では205名中の92名から138通りの回答(複数回答可とした)が得られた。分類分けした目標に関する課題は「社会的行動目標(47名)」に関する意見が最も多く挙げられた。

認識目標への意見は、「新しいことがわかること(2名)」や「話し合う時間はそれほどいらない(1名)」といったように、認識目標を重視する意見と運動重視ともの意見があった。

一方で、「正しい評価をしてほしい(2名)」、「もっと努力を評価に入れてほしい(2名)」、「子どもにやらせっぱなしの授業にしないこと(2名)」といった授業方法や評価に関する意見や、「体育の必要性を感じない(1名)」といった意見など、批判的な意見が挙げられた。

これらの意見から、学校現場において体育授業の学習目標・内容が不鮮明で、それに対応した評価についても不審を抱かれていると思われる。改訂学習指導要領<sup>7)</sup>の基本方針は、学習内容を明確に位置づけ、それらをより確かに習得させることであった。これまでの体育は、「楽しい体育」に標榜されるように、「今もっている力」をベースとして自主的・自発的に学習していく学習過程モ

デルが推奨されてきた。しかし、この授業モデルでは、運動の基礎・基本が習得されないまま授業が展開された場合、低次元に終わり、「這いまわる現象」が表れる。体育教師自らが子どもたちに何をどのように学ばせるのかを明確に提示し、その目標に対して真の評価(オーセンティック・アセスメント)を実行しなければならない。

#### Ⅳ. まとめ

本研究は、体育授業における生徒の学習目標への意識とその実施状況を検討することを目的とし、愛知県内公立中学校7校の生徒1616名と教師205名を対象に調査・分析を行った。その結果、生徒の体育授業に対する意識とその実施状況、及び教師の体育授業に対する意識が明らかとなった。

- ①体育授業において、生徒は「できる」や「わかる」に関する意識が低く、社会的行動の学習を重視している。
- ②男子は女子よりも「できる」と「わかる」に強い関心をもって学習しているが、女子は友だちと仲良く楽しくする体育を望んでいる。
- ③1学年は他の学年よりも目標4次元全てに対して意識が高い。これは、思春期に入る2学年において、授業に対して規範意識が低下するからだと考えられる。
- ④教科に関わらず、全ての教師は体育授業において社会的行動を重視するべきだと考えている。加えて、体育教師は「できる」に関する学習に高い意識を持って授業を行っている。
- ⑤生徒は教師全体よりも体育授業の中で「わかる」に関する目標を意識している。

「できる」「わかる」「かかわる」の3者がうまく行われたときにはじめて「楽しい」という情意的目標が達成され授業が成功する。しかし、本研究においては、体育授業に対する教育的な期待が「できる」「わかる」よりも社会的行動に偏っていることがわかった。歴史的背景からみて、体育はその時代時代に社会が要請する人間像に大きく左右されてきた教科である一方で、そのいつ何時も社会的行動を育むための手段的な教科として扱われてきた。その体育の特徴が現在も色濃く残って

いる。手段的な教科という周辺の教科の扱いから脱却するためには、体育の教科としての存在価値や概念をよりはっきりさせていき、「できる」「わかる」を体育の主要な目標としていく必要がある。さらに、体育授業における目標の軸を「できる」「わかる」とした授業実践を行い、その学習成果（オーセンティック・アセスメント）を検討していくことが今後求められるだろう。そのことが教師の説明責任（アカウンタビリティ）である。

## V. 引用・参考文献

- 1) 木村真知子：Lecture2ー体育運動の分類ー。  
（金子明友・朝岡正雄編著）。運動学講義，  
33-42，大修館書店，東京，1990
- 2) 木村清人：教育三法改正と学校体育のこれから。女子体育 50（1）：4-5，2008
- 3) Crum：The critical-constructive movement socialization concept. International Journal of Education 19（1）：9-17，1992
- 4) 友添秀則：体育における認識学習を考えるー技能に関わる知識を中心にー。女子体育 50（1）：30-35，2008
- 5) 佐藤豊・今関豊一：中学校学習指導要領の改訂と各教科等の展望・保健体育。（文部科学省）。中等教育資料，865（6），54-57，ぎょうせい，東京，2008
- 6) 高田俊也・岡澤祥訓・高橋健夫：（高橋健夫）。体育授業を観察評価するー授業改善のためのオーセンティック・アセスメントー，7-34，明和出版，東京，2003
- 7) 文部科学省：教育基本法ー中学校学習指導要領ー，2-5，東山書房，京都，2008  
（指導教員 福ヶ迫善彦）